中国地区英語教育学会研究紀要№6（1976）

新しい言語観、学習観の中におけるパタンプラクティスの位置

呉工業高等専門学校　山　岡　俊比古

1　はじめに

外国語教育において、いわゆる Audio-Lingual Habit Theory（以下A-LH 理論と略す）と呼ばれる理論が隆盛を極め、その中で Pattern Practice（以下PPと略す）の有効性あるいは必要性が繰り返し主張された時期があった。しかし、言語あるいは学習についての新しい考え方の抬頭と伴に A-LH 理論への批判が、特に PP 批判という形で盛んになされてきたのである。このような PP 批判に対しては PP の擁護者からの反論がなされてきたのであるが、最近特にその傾向が強くなっているといえる。このような状勢を考慮に入れた上で、この小論では、A-LH 理論あるいは PP の特徴、それらが批判される理由、さらに PP 批判に対する反論の論拠を概観しながら、今一度、別の新しい視点から PP の外国語習得過程の中における厳密な位置づけを求めてゆきたい。

2　A－LH理論とPPの特徴

外国語教育における、非常に具体的な指導テクニックである PP を生み出したのが、A-LH 理論であり、その理論的基盤が構造主義言語学と行動主義心理学であったことは広く認められている。構造主義言語学の言語に対する基本的な捕え方、行動主義心理学の学習に対する主張を反映してこの A-LH 理論は基本的特徴として、言語の第一義は音であるとすることによる耳と口による反応を優先すること、言語は習慣であり習慣は自動化されなければならないこと、自動化は繰り返しを主とする練習によってなし得るとする主張を持っていた(2、278)。換言すれば、この理論は、言語はパタンから成り、学習者はそれを繰り返しと強化によって習慣として習得すべきものであるとしている(1、192)。このような A-LH 理論の基本的主張を実現するために、つまり言語行動を習慣化するために、行動の無意識化を促すための練習の必要性が考えられ、それをみたすものとしてPPが現われた。従って　とは、学習者の注意を徐々に問題となる点からそらし、その問題点を含んでいる例文を使うようにしむけるための練習であり、学習者の注意を問題となるパタン以外のものにおき、その問題となるパタンに対して行なわれる素早い口頭練習であると定義される(8、105)。

3　新しい言語観、言語習得観とPP批判

A-LH 理論は、1960年代のアメリカにおいて最も広く受け入れられていたと言えるが、70年代においては、教授法に関して一致した見解はなく、多くの教師が折衷主義を唱えている状況に到っている(5、65－66)。この変遷の理由は、言語に対する新しい見方の抬頭、心理学の新しい潮流によって A-LH 理論の基盤が切りくずされてしまったことにある。この新しい見方は、言語は習慣形成によるものではなく、その本質的性質として習慣形成では説明できない、いわゆる創造性を持つものであるということ(4、53)、さらに言語は、規則に支配された行動であるといった主張に代表されるものである。また、学習についても、刺激、反応、強化の概念は学習における学習者の内的な出来ごとを無視してしまっているとする指摘がなされた(7、185)。このような外国語教育における理論の変遷は、さきに述べたような性格と目的を持つ PP に対する批判という形で最も端的に表われているといえる。批判の論拠は当然、言語はパタンから成るのか、言語は習慣づけで習得されるのかといった疑問点から出ており、もちろんこれは、言語使用は規則に支配された行動であるとす

る新しい考え方、および母国語習得過程の研究成果を背景にしていることは言うまでもない。人が言語を習得してゆく過程は自分のふれた個々の文を記憶してゆくのではなく、個々の文を支配している規則を習得しているのであり、だからこそ、それまでに聞いたこともない、読んだこともない文を作り出せるのだと考えられている。また母国語の習得過程の観察から、言語の習得は刺激、反応と強化のモデルで示されるほど単純でなく、そのような受身的な行為でもないことが分ってきている。このような言語の性質、習得過程にみられる事実に PP は対応できないものであると判定されたのである。もちろん、実際に PP を行った後で期待した効果が出てこないという現実的な反省もあった。PP を批判し、その効果を限定化しようとする論の中には、その効果を音声の表出技能の自動化だけにきびしく限定したものもある(6、106)。このように PP に対する批判は、当然のことではあるが、PP を具体的指導テクニックとして生み出した A-LH 理論の理論的基盤の不備を指摘することと同時に行なわれている点に特徴があるといえる。

4 PP批判に対する反論

以上のような PP 批判に対して反論がなされているわけであるが、PP 批判は上で述べたように、PPが依っている理論の不備を指摘することにより行なわれているのが特徴であるが、これに対する反論は PP の理論的支柱の不十分性を認めながらも、実際の習得過程の中での PP の有効性を依然として主張するという特徴を持っているといえる。例えば T.G. Brown は、言語行動は習慣がより集まったもの(a set of habits) とはみなし得ないが、発話行為そのものは自動的な行為であるとして、いかに PP が理論的に不備であるにしろ、実際の指導場面で生じる問題には対応できるものであるとしている(1、196－197)。また、J.W. Ney は、規則に支配された行動と主張される場合の規則の内部化が条件づけでなされないとしたら、他にどんな方法があるのかを問い、さらに、言語の深層構造における普遍性を認めるにしても、我々が対処しなければならないのは言語ごとに異なる表面構造であるとして条件づけが言語習得の中で果し得る役割を強調している(9、9)。このように PP 批判に対する反論は、少くとも母国語話者はことばを無意識的に習慣的に使っているのだから、外国語学習者もそのための練習が必要であるとし、そこに PP の役割を見い出しているといえる。これらの論は理論的分析の結果というより実践の側に立脚しているものと思われるが、この立場をより良く理解するためには、上で述べた PP を批判した新しい考え方も、実際的にはそれだけで言語のすべてを説明できるものではないという点に注意しなければならない。例えば、言語の本性としての創造性も、創造性の度合を考慮に入れると幾つかのレベルに渡っていることが分り、全く創造的とは呼べないものも含んでいることが分る(10、21－24)。また、新しい考え方の中の規則の概念と、その批判の対象とされている習慣の概念、さらにはパタンの概念に厳密性がなく、これらの相互関連も極めて不明瞭であると言わなければならない。我々は、規則の適用の最終的結果がパタンを作り、このパタンを生む規則の適用が自動的、無意識的に行なわれれば、これを習慣と呼ぶことができるという点も念頭においておかなければならない。規則に支配された行動という概念と習慣の概念は相反するものではないという指摘がある(3、102－106)。

5 別の視点からのPP批判

以上の PP に対する批判、それに対する反論の概観に対し、これ以上の考察を加えなければ、PP 批判に対する反論の立場が支持されると思われるかもしれない。しかし、ここで全く別の視点から PPの批判を試みてみたい。この試みの端緒となる疑問点は、母国語話者が全く無意識的に習慣的に言語を使っている以上、それに到達するための何らかの練習が必要であることは確かであるが、母

国語話者の持っている上で述べた意味での習慣と、PP で目標とされている習慣とがかなり異なっているのではないかという点である。まず、PP で習慣的に自動的になるとされるものと、母国語話者が自然な発話において示す習慣性、自動性とを比較することによって PP の持っているもう一つの性格を明らかにしたい。自発的な発話においては、ある意味・概念を表現しようとする心の動きを intention と呼ぶとすると、その intention に喚起されて、表現しようとする意味・概念のすべてを前もって意識しながら、それを文として表わすと考えられる。前もって、表現しようとする意味・概念を意識していることが自発的な発話の大きな特徴だといえる。このことは、いわゆる文が発話者の内部において左から右へ連なる単なる線状的な構成になっているのではなく、階層的な構成を持っているとされるゆえんである。逆に言えば、文として表現される意味・概念を前もって知っていることが、その文の階層的構成を可能にしているとも言える。従って、自然な発話においては、前もって明確に意識されている意味・概念にいわば裏うちされながら、むしろそれを最大の手がかりとして文の形成を行っているといえる。これに対し PP では、言わんとする文によって表わされる意味・概念が前もって意識されているかどうか非常に疑わしく、それが明確に意識され得るのは、むしろ、その文の表出を終えた段階である可能性が大であると言わなければならない。従ってその文の形成も階層的ではなく、単なる線状的な過程を経るだけである。さらに文の表出の契機になるもの、表出を喚起するものが上に述べたような intention ではなく、練習している文型と与えられる鍵（cue）であることも明らかである。このようにみてくると、習慣的に自動的に行なわれる自然な発話に示されるその習慣性、自動性と、PP で達成される習慣性、自動性の差異が明らかになってくる。両者とも、最終的ともいえる文の音声化のレベルにおいては、等しく自動的に行なわれるものの、この最終的な音声化に到るまでの文の形成の過程が全く異なっているといわなければならない。PP においては、文を音声化するまでの内的な文形成の過程が無視されており、また PP はそのような内的な過程と脈絡を持ち得ないものであるともいえる。自然な発話においては、この内的な文形成の過程こそが自動的であり習慣的であるのであり、文が自動的、習慣的に表出されるのは、その必然の結果ともいえるのである。PP は、自然な発話の表面的な最終的な文表出のみに着目して、その内的な過程を無視してしまったのだともいえる。PP がめざした習慣化すべきものと、自発的な発話の習慣性とは、以上のような質的な差があることを認めないわけにはいかない。もちろん、当時 A-LH 理論にのっとり PP を唱導した人々も、PP は、本物の発話とは異なったものであり、言語習得のすべてが PP でなし得るものではないと繰り返し注意している。例えば、Lado は言語学習を4つの段階に分けており、PP を最終段階の前段階の位置を与えている(8、112)。しかし PP が、学習段階の中で確実なステップを踏み、しかもそれが最終段階へ移行し得るのに十分なだけの効果を持つかどうかは極めて疑わしい。また PP を操作技能(manipulation skills) のレベルに限定し、コミュニケーションを行ない得る能力の前段階に位置づけている場合もあるが、PP の性格が上でみてきたようなものである限り、この操作技能という語の意味する実体は極めて貧しく、容易にはコミュニケーションの能力には移行し得ないものである。しばしば、教室で PP をうまく行なえる生徒が、実際の場面でうまくコミュニケーションができないと指摘があるのは、むしろ当然と言わなければならない。

以上の考察の結果、新しい言語観、学習観からの主張を認めた上でなおかつ習慣形成のための練習が必要であるとして、その役割を PP に見い出した Ney, Brown らの立場に対して、別の視点から改めて批判を加えることができ、PP の有効性をさらに限定化しなければならないことになる。

REFERENCES

1. Brown, T.G. "In Defence of Pattern Practice," LL, XIX, 1969, pp.191-203.

2. Carroll, J.B. "The Contributuion of Psychological Theory and Educational Research to the Teaching of Foreign Languages," MLJ, XLIX, 1965, pp. 273-281.

3. _____. "Current Issues in Psycholinguistics and Second Language Teaching," TESOL Q, 5, 1971, pp. 101-114.

4. Chomsky, N. Linguistic Theory. In M. Lester(Ed.), Readings in Applied Transformational Grammar. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1970, pp. 51-60.

5. Diller, K.C. "Some New Trends for Applied Linguistics and Foreign Language Teaching in the United States," TESOL Q, 9, 1975, pp. 65-73.

6. Jakobovits, L.A. "Implications of Recent Psycholinguistic Development for the Teaching of a Second Language," LL, XVIII, 1968, pp. 89-109.

7. _____. Physiology and Psychology of Second Language Learning. In D.L. Lange(Ed.), Britannica Review of Foreign Language Education, Vol.1. Chicago: Encyclopaedia, Inc., 1969, pp. 181-226.

8. Lado, R. Language Teaching: A Scientific Approach. New York: McGraw-Hill, Inc., 1964.

9. Ney, J.W. "The Oral Approach: A Re-Appraisal," LL, XVIII, 1968, pp. 3-13.

10. 山岡俊比古 「外国語における言語的創造性」 『中国地区英語教育学会研究紀要』 №4、1974、PP 21 - 24。